

中世における『教行信証』諸本間の訓読の異同

——「者」字の訓読法について——

永松寛明

目次

- 一、はじめに
- 二、考察対象資料について
- 三、坂東本『教行信証』と高田慶長本『教行信証』二資料の比較
- 四、諸本における「者」字に関する訓読の異同について
- 五、おわりに

一、はじめに

従来、中近世の仏教社会における訓読のあり方は、中古において使用された訓読の古い形を承け伝えていると説かれてきた。しかし、実際の個々の資料に即して、中近世の訓読の具体的な実態について述べられたものは未だ多くないと考える。⁽¹⁾

本論では、鎌倉時代に成立した『教行信証』の中世における各写本を取り上げて、訓読の比較を行い、中世における仏教社会の訓読の実態を考察したい。『教行信証』は浄土真宗開祖親鸞の撰述であり、浄土真宗における重要な教典の一

つである。その『教行信証』写本のうち、高田慶長本と中山寺本は、奥書が同一であり、いずれも正応四年の出版本を祖本とする非常に近い系統であるとされる。⁽²⁾この両者の奥書には、「字点」つまり訓点を変更しないようにという注記が存する。奥書の一部を次に掲げる。

高田慶長本・化卷末奥書／中山寺本・化卷末奥書（訓点等は省略した傍線は論者による）

〔中略〕庶幾後生勿令加減於字点矣本云于時正応四年五月始之同八月上旬終功畢〕

この奥書から考えて、一般的にはその内容を承け伝える際には、訓点も忠実に写されることが想像される。しかし、先学の論において、中世の各写本類の相互には本文を初めとして訓点に差が存することが指摘されており、⁽³⁾実際には、訓読が変わっているものと考えられる。『教行信証』坂東本は長い期間親鸞自身によって推敲されたために、その期間に幾度か書写され、そこで生じた系統にも訓読の差が存するようである。しかし、本論では、この系統による訓読の差以外に、諸本の書写がなされていく間に生まれた訓読の変化について考察し、中世仏教社会の訓読のあり方を検討する。

又、資料の選定について付言すると、中世に書写された写本間で訓読の変化を見出すことを目的として調査を進めるにあたって、祖本の成立が新しい中世期の写本について訓読の差が現れたならば、その差は中世の訓読の変化である可能性が高い。しかし、祖本の成立が古く、平安期やそれ以前の資料について訓読の差が現れた場合、その差の中から中世の訓読の変化を抽出するには様々な問題を伴う。書写移点時に平安期やそれ以前の点本を参看した可能性が存するかである。そこで、各写本を比較し、中世における訓読の変化を指摘しようとするときに、出来る限り成立の新しい資料を対象とすることが望ましい。以上の点から鎌倉時代に日本人が書いた漢文でほぼ同時期に訓点が施された『教行信証』を対象資料として取り上げることとする。

方法としては、先ず時代的に隔たりのある二資料の間で訓読の比較を試みる。一資料は、親鸞自筆とされる坂東本である。比較の資料として、中世末期書写資料である高田慶長本を取り上げる。両本ともに書写された時代が特定出来、

中世において書写年代に隔たりがある資料として取り上げた。この二資料の間で如何なる箇所⁽⁴⁾に訓読の異同が見られるかを巻二において整理する。続いて本論では、右の比較で顕著な異同を示す「者」字⁽⁵⁾について取り上げ、他の写本でも同様に異同が存するか否かを探る。その結果と、同一の祖本を有する写本どうしの訓読の比較によつて、「教行信証」の訓読ではいかなる表現において変化が現れ易いのかを明らかにする。

二、考察対象資料について

以下に本論に取り上げた諸本の奥書を掲げる。尚、各写本の分類名、書写年代の推定は重見一行氏の指摘に従つた。⁽⁶⁾奥書において改行は特に示していない。

坂東本 (大谷本願寺蔵) (一二六二年以前写)

行巻奥 「弘安陸癸未二月二日釈明性讓預之(以下切断)」

化巻末奥 「弘安陸癸未二月二日釈明性讓預之 沙門性信(花押)」

真宗寺本 (新潟市西堀通真宗寺蔵) (一四二五年写)

化巻末奥 「今此教行証者祖師親鸞法師選述也立章於六篇調卷於六軸皆引經論真文各備往生潤色誠是真宗紹隆之鴻基
実教流布之淵源末世相応之目足即往安樂之指南也應永卅二年十月廿八日奉書写之畢」

文明本 (山口県美称郡秋芳町明厳寺蔵) (二四七〇年写)

教巻奥 「本云寛元五年二月五日以善信聖人御真筆秘本加書写校合訖文義字訓等重委註了 隠倫尊蓮六十六歳今年聖人七十五歳也」

化卷末奥「今此教行証者祖師親鸞法師選述也立章於六扁調卷於六軸皆引經論真文各備往生潤色誠是真宗紹隆之鴻基
実教流布之淵源末世相応之目足即往安樂之指南也而去弘安六曆歲次^{癸未}春于時正応四年五月始之同八月上
旬終功畢文明二年^{庚寅}九月上旬於河州書寫畢雖惡筆爲仏法興隆結縁值遇如形馳筆後見嘲千悔々々雖有文字
不審如本寫畢」

高田慶長本 (三重県津市一身田町専修寺藏) (一六〇〇年写)

化卷本表紙見返し「惣外題ト教ノ巻ト此ノ化身土二巻ハ堯秀上人御筆也」(教卷見返しにも同様の記述あり)

信卷末奥「時慶長第五聖曆竜集^{庚子}初春中旬八日本寺依 当門跡堯真様尊命不顧老筆拙書之汗顔々々 信楽院慶忍七

十歳

証巻奥 「御本寺依 当門跡様尊命拭老眼書之慶長第五聖曆竜集^{庚子}林鐘廿八日^{信楽院七十歳}」

化卷末奥「中略」庶幾後生勿令加減於字点矣本云于時正応四年五月始之同八月上旬終功畢」

(引用に際しては訓点等を省略した箇所がある)

中山寺本 (三重県四日市市南小松町中山寺藏) (一六〇〇年頃写)

証巻奥 「右本末八卷之御書相州高座郡深見郷沢柳村長雲山善徳寺 権律師栄存在」

化卷末奥「中略」庶幾後生勿令加減於字点矣本云于時正応四年五月始之同八月上旬終功畢」

寿福院本 (三重県鈴鹿市三日市寿福院藏) (室町時代写) (奥書なし)

中世における『教行信証』諸本間の訓読の異同

西蓮寺本 (滋賀県草津市上寺町西蓮寺藏) (室町時代写 教行巻後補 信巻本以下は南北朝時代写) (奥書なし)

高田室町末期本 (三重県津市一身田町専修寺藏) (高田慶長本と同時頃書写か) (化巻末奥に高田慶長本と同様の奥書あり)

坂東本の奥書からは、性信なる人物が弘安六年(一二八三)に自筆本を譲り受けたことが知られる。先学の論によると草稿本である坂東本は、親鸞が長年にわたり手を加えていることから、現在の状態に到つたのは、親鸞入滅弘長二年(一二六二)以前であると思われる。真宗寺本は、応永三十二年(一四二五)写である。返点の様相からも室町時代初期の加点ではないかと考えられる。文明本は文明二年(一四七〇)写である。返点の様相や、奥書の「雖有文字不審如本写畢」といった記述などから訓点も同時代に付されたと考えられる。又、高田慶長本(以下慶長本と呼ぶ)は慶長五年(一六〇〇)写である。本文が複数の人物によつて書写されており、それに応じて訓も筆跡が異なることから、加点も同時期になされたものと考えられる。その他検討に用いた寿福院本、西蓮寺本は室町時代写、中山寺本、高田室町末期本は慶長本とほぼ同じ時期に書写されたといわれる⁽⁸⁾。

次に、『教行信証』の各写本の系統について先学が明らかにされた点について述べる。

重見一行氏は『教行信証』の写本の系統について以下の点を指摘された⁽⁹⁾。

- 一、系統の分類は、大まかには分冊数で判明する。
- 一、一つは六冊本系統、一つは正応四年の出版本を原本とする八冊本系統。
- 一、六冊本形態の写本が、次第に八冊本形態を取るようになった。
- 一、親鸞自筆の坂東本は、幾度か改訂を行っている。

一、六冊本の中には、坂東本の幾つかの改訂時期ごとに生まれた異なる書写本がある。以上を指摘した上で、次のように系統を分類されている。

- 六冊本系 a 坂東本系 b 専修寺本系 c 西本願寺本系 d 存覚本系 e 大業寺本系 f その他
 八冊本系 g 高田系 h 本願寺系

先ず、これらの系統毎に訓読の異同を確認すべきであるが、本論第四節で述べる検討より、系統と訓読の關係は必ずしも緊密ではない場合がある。そのことから、通時的に配列した資料間に見られる異同を解釈する際に、系統ごとに訓読が異なるという観点を導入することは必ずしも有効ではないと考える。そこで、今回は書写年の判明する写本を通時的に配列し、系統間の差という観点を除いて比較を行った。

三、坂東本『教行信証』と高田慶長本『教行信証』二資料の比較

先ず、坂東本と慶長本の巻二における訓読の異同を概観し、異同として現れる事象について述べることにする。

1、実字の訓読の異同

表一 『教行信証』巻二における二資料間の実字の訓読の異同一覧

所在(頁)	坂東本		漢字	坂東本	慶長本
	(頁)	(行)			
19		5	聞	(キコ)ハ	
34		7	聞	ケナリ「サウル」	カクルコト
41		7	明	(アキラカ)ニシテ	(アキラ)ケシ

注 和訓における、は踊り字

和訓の「」は補説

和訓の「」は左傍訓

126	123	117	113	113	103	95	89	88	88	82	81	80	77	69	66	60	42
1	3	1	6	5	5	6	6	5	3	4	6	7	8	5	5	4	4
渉	従	行	自	自	抛	脱	甘	居士	呼吸	借問	借問	開	自	何	倒	構	退
セウ「ヤウヤク」	ヨリ	(ユ)クニ	オノツカラ	オノツカラ	ナケウテ、	ヌカル	アマク	オトコナリ「キルヒト」	コキウ	トフ	シヤクトフ「カリ」	(ヒラ)クカ	オノツカラ	(イカ)ナル	タフル、ニ	シホシ	(タイ)セ
セウ「ワタル」	(シタカヒ)テ	アルキニ	(ヨ)リ	ヨリ	ナケヌテ、	(ダツ)シ	アマネク	コ	コキウ「イツルイキ イルイキ」	シヤク	(シヤクモン)ス	(ア)クルカ	ミ(ツカラ)「ヲノツカラ」	(ナン)ノ	タラル、コト	シホリ	シリソク

坂東本は「観鷲聖人真蹟集成」卷一による
所在の数字は頁数と行数

131	129	128
7	1	2
竭	断	曰
カワカシテ「カテ」	タツガ (ダン)スルガ	マフサク (マウ)ス
カワカシメテ		

右の表一は、坂東本と慶長本との同一箇所の実字の訓読の異同を一覧したものである。欄上から坂東本の所在位置、当該漢字、坂東本における訓、慶長本における訓を示す。この表より、二資料における実字の訓読の異同は、二十四例になることがわかり、実字の訓読について、慶長本の訓読が坂東本と全同ではないことが知られる。これらの異同が何故生じたのかについて、更に調査が必要であろうが、その検討は今後の課題としたい。

2、実字の訓読以外の異同

表二 『教行信証』巻二における二資料間の訓読の異同一覧

異同の項目	読添語・助動詞				
	単語・漢字	用例数	坂東本	慶長本	量的傾向
ム		11	3	慶少	
ン		*	6	慶少	
ベシ		1	*	慶少	
キ		1	*	慶少	
ツ		1	*	慶少	
ヌ		1	*	慶少	

注 「慶少」は坂東本より慶長本の語数が少ない項目
「坂慶同」は坂東本と慶長本に同じ異同数が存する項目
量的傾向の空欄は慶長本より坂東本の語数が少ない項目
*は用例が存しない項目

読添語・その他		読添語・助詞																
モノ	コト	テ	バ	ヤ	カ	ゾ	ハ	シテ	ヨリ	ト	ニ	ヲ	ノ	ナリ	シム	ル	タリ	リ
1	2	3	7	3	5	1	2	*	1	3	3	3	4	6	7	1	*	9
*	4	8	3	3	1	*	9	2	*	3	2	1	1	3	*	*	1	4
慶少			慶少	坂慶同	慶少	慶少			慶少	坂慶同	慶少	慶少	慶少	慶少	慶少	慶少		慶少

実字の訓読	助字に関する訓読									
	將	令	乎	於	者	タテマツル	タマフ	ノタマフ	イフ	ス
24	1	1	2	21	17	*	*	1	1	1
						2	5	*	2	*
								慶少		慶少

表二は、坂東本と慶長本との同一箇所助字と読添語を中心とする訓読の異同を集計したものである。右から、読添語の異同数、助字に関する訓読の異同数、先に示した実字の訓読の異同数、という順で示した。読添語については単語ごとに板東本と慶長本での数の違いを示した。用例の集計について述べる、読添語の異同の数は、当該助動詞や助詞が、一方にのみ存して、他方にないときに、異同の一用例とした。

例えば、

撰_ニ受_シマフヘシト 弟子_一 (69・3) (坂東本) 撰_ニ受_シマヘリ 弟子_一 (29オ3) (慶長本) (数字は丁行数)

中世における『教行信証』諸本間の訓読の異同

については、坂東本に「ベシ」が一例存するが、慶長本には存しない。この場合、坂東本に「ベシ」を一例計上する。一方、慶長本に「リ」が一例存するが、坂東本には存しない。この場合、慶長本に「リ」を一例計上する。

このように集計したものが表二である。表中、助動詞は異なり十一語、助詞は異なり十二語、形式語は異なり七語にわたって異同が見られるが、その異同の延べ語数は、本資料中に使用された各助動詞や助詞の延べ語数に比して極めて少ないと判断される。表中には示していないが、例えば坂東本において「リ」は卷二全体では百十六例存し、その中で異同は九例である。異同の現れる比率は七・七%と延べ語数の一割に満たない。

又、異同の多寡に注目したものが、表中の「量的傾向」である。これによると、助動詞に関して坂東本に見られたもので慶長本では減少しているものが多く、助動詞の異なり数が、慶長本では少なくなっていることがうかがえる。

表二の異同の具体例について述べると、読添語の助動詞「ム」や「リ」の異同として左の如き例がある。

有 ^{マシマス}	斯勝益 ^シ (70・8) (坂東本)	求 ^{セト} 願 ^ト	往生 ^シ (69・2) (坂東本)
有 ^{マシマサム}	斯勝益 ^シ (30オ3) (慶長本)	求 ^{セリ} 願 ^ト	往生 ^シ (29オ3) (慶長本)

上段の用例は、坂東本が助動詞のみのところ、慶長本は助動詞に助動詞「ム」を読添えている。下段の用例は、坂東本が助動詞の命令形で文を終えるところ、慶長本は助動詞「リ」を読添えている。

次に、助字に関する訓読の異同例について述べる。

先ず、「者」字は、卷二以外も含めると、『教行信証』中最も異同の用例数が多く、担っている用法も複数存し、それぞれの用法に異同が見られる。用例は後述する。

「於」字は、目的格を示し、不読されることの多い用法において異同が存する。左の用例の如く、坂東本では「於」字に直接、助詞の加点をしているが、同じ箇所を慶長本では不読にしている。

出^{タリ}於^{ヨリ}大^{ダイ}悲^ヒ願^{ガン} (15・6) (坂東本)

莫^{ナシ}不^フ称^{ショウ} 嘆^{ソク}於^{ケル}彼^{カノ} (17・5) (坂東本)

出^{タリ}於^{ヨリ}大^{ダイ}悲^ヒ願^{ガン} (1ウ1) (慶長本)

莫^{ナシ}不^フ称^{ショウ} 嘆^{ソク}於^{ケル}彼^{カノ} (2オ6) (慶長本)

「平」字も、「於」字と同様に目的格を示す用法において異同を示す例がある。

求^ム乎^カ法^{ホウ}身^{シン} (76・8) (坂東本)

求^ム乎^カ法^{ホウ}身^{シン} (34オ5) (慶長本)

「令」字は、この字を使役の助字として使う場合、その使役構文の説添語に異同が見られる。「ラモテシメム」と

「ラシテシメム」という違いである。

令^{メム}我^ガ名^ナ字^ジ 皆^{ラモテ}聞^カ八^ハ方^{ホウ}上^{ジョウ}下^ゲ無^ム央^{オウ}数^{スウ} 仏^{ブツ}国^{クニ} (19・5) (坂東本)

令^{メム}我^ガ名^ナ字^ジ 皆^{ラモテ}聞^カ八^ハ方^{ホウ}上^{ジョウ}下^ゲ無^ム央^{オウ}数^{スウ} 仏^{ブツ}国^{クニ} (3オ5) (慶長本)

「将」字については坂東本では再読しているが、慶長本では再読していない例がある。

当^ニ作^テ世^セ尊^{ソウ} 将^ニ度^ト 一^ニ切^セ生^{セイ}老^{ロウ}死^シ (26・1) (坂東本)

当^ニ作^テ世^セ尊^{ソウ} 将^ニ度^ト 一^ニ切^セ生^{セイ}老^{ロウ}死^シ (6ウ3) (慶長本)

尚、表二には含めなかったが、返点の形態や仮名遣い等、表記上の異同が多数存する。例えば、

為_ニ衆_一 (16・6) (坂東本)

何_レ在_ム邪_ヤ (93・6) (坂東本)

為_レ衆_一 (2ウ1) (慶長本)

何_レ在_ヅ耶_ヤ (44オ4) (慶長本)

の如き一・二点とレ点といった違いや「ム」と「ン」といった仮名遣いの違い等であるが、今回の調査の対象からは除いた。

二資料の比較の結果、実字や助字や読添語の訓読などに、異同を見いだすことができる。しかし、訓読語全体の言語量に比すると異同の出現箇所はその一部でしかない。

調査の結果、異同の見られた事象についてまとめておくと以下の三点になる。

一、「者」「於」「乎」「将」字等の助字に関する訓読の異同

二、実字の訓読の異同

三、読添語の異なり語数の減少

三は既に先字に指摘がある⁽¹⁰⁾。本論では、助字の項目に含まれる「者」字に関する訓読を取り上げて、以下に、中世の各写本間においていかなる異同が見いだされるかを述べることにする。

四、諸本における「者」字に関する訓読の異同について

先の第二節に示した諸本の間で「者」字に関する訓読を取り上げ、検討する。ここで扱う諸本とは、坂東本、真宗寺本、文明本、慶長本の四資料と、適宜書写年代が詳細には判明していない資料も用いる。

「者」字に関する訓読を整理すると、提示説明の表現に使われるもの、事物を指示する表現に使われるもの、接続の表現に使われるもの、その他の四つに分類される。各分類項目毎に、時間的に後に書写された資料になるほど坂東本とは

異なる訓読の出現が認められる。こうした傾向は卷二に限らず各巻に見出される。以下にその例を示し、考察を加える。

提示説明の表現とは、「者」字に助詞「ハ」が付訓され、他と区別して強調する働きを有しているものである。「者」字の傍線は論者による。

仏^{シメタマフオ}遺^ニ行者^セ即行^ハス (19・7) (坂東本)

仏^{シメユラ}遺^レ行者^セ即行^ス (10オ1) (真宗寺本・信巻本)

仏^{メドフ}遺^レ行者^セ即行^ス (10オ1) (文明本・信巻本)

仏^{シメクマワラ}遺^{レバ}行者^セ即行^ハ (10オ3) (慶長本・信巻本)

右の例では、加点点年次が最も降る慶長本に「者」字の別訓として、助詞「ハ」を直接に付訓していない例が見られる。

不見^ス伊^ミ蘭^{ヨリ}生^{スル}梅^ニ檀^ツ樹^ハ者^ハ我^ハ今^チ始^テ見^ル從^ニ伊^ミ蘭^子生^{スル}中^ニ (143・2) (坂東本)

不見^ス伊^ミ蘭^{ヨリ}生^{スル}梅^ニ檀^ツ樹^ハ者^ハ我^ハ今^チ始^テ見^ル從^ニ伊^ミ蘭^子生^{スル}中^ニ (39ウ2) (真宗寺本・信巻末)

不見^ス伊^ミ蘭^{ヨリ}生^{スル}梅^ニ檀^ツ樹^ハ者^ハ我^ハ今^チ始^テ見^ル從^ニ伊^ミ蘭^子生^{スル}中^ニ (39ウ2) (文明本・信巻末)

不見^ス伊^ミ蘭^{ヨリ}生^{スル}梅^ニ檀^ツ樹^ハ者^ハ我^ハ今^チ始^テ見^ル從^ニ伊^ミ蘭^子生^{スル}中^ニ (39ウ2) (慶長本・信巻末)

右の例では、坂東本で「者」字に「バ」と付訓するのに対し、真宗寺本と文明本とでは「(モ)ノヲ」と付訓して「者」

字を詞訓として訓んでいる。

又火焰常焼道者即 (33・5) (板東本)

又火焰常焼道者即 (18オ4) (真宗寺本・信卷本)

又火焰常焼道者即 (18オ4) (文明本・信卷本)

又火焰常焼道者即 (18オ6) (慶長本・信卷本)

又、坂東本で「ハ」とある箇所を「トハ」と付訓する例が真宗寺本と文明本に存する。

事物指示の表現とは、「者」字に「ヒト」や「モノ」といった付訓がされて、主に具体的な事柄が指示されている例等を指す。

言_下如_三是_ノ等_ラ類_ラ大_ノ威_ノ徳_ノ者_ト能_ク生_ルト_上大_ノ異_ノ門_ニ (90・7) (板東本)

言_下如_レ是_ノ等_ラ類_ラ大_ノ威_ノ徳_ノ者_ト能_ク生_ルト_上大_ノ異_ノ門_ニ (9オ1) (真宗寺本・信卷末)

言_三如_レ是_ノ等_ラ類_ラ大_ノ威_ノ徳_ノ者_ト能_ク生_ルト_上大_ノ異_ノ門_ニ (8ウ6) (文明本・信卷末)

言_下如_レ是_ノ等_ラ類_ラ大_ノ威_ノ徳_ノ者_ト能_ク生_ルト_上大_ノ異_ノ門_ニ (9オ1) (慶長本・信卷末)

右の例では、坂東本と慶長本とで「ヒト」と付訓されている箇所が、真宗寺本と文明本とでは「(モ)ノハ」と付訓さ

れている。

接続の表現とは、「者」字に接続助詞「バ」を付訓して条件表現を表している例を指す。

- 又若^シ起^サ善^ノ三業^ヲ者^ハ必^モ須^キニ真^ニ実^ニ心^ノ中^ニ作^ル一^ニ (18・2) (板東本)
- 又若^シ起^サ善^ノ三業^ヲ者^ハ必^モ須^キニ真^ニ実^ニ心^ノ中^ニ作^ル一^ニ (9オ2) (真宗寺本・信巻本)
- 又若^シ起^サ善^ノ三業^ヲ者^ハ必^モ須^キニ真^ニ実^ニ心^ノ中^ニ作^ル一^ニ (9オ1) (文明本・信巻本)
- 又若^シ起^サ善^ノ三業^ヲ者^ハ必^モ須^キニ真^ニ実^ニ心^ノ中^ニ作^ル一^ニ (9オ3) (慶長本・信巻本)

右の例において坂東本では、接続助詞「バ」が「者」字の右傍に付訓されているが、慶長本では「者」字の直前に訓読される「起」字に「バ」が付訓されて、「者」字は不読とされている。

以上の用例からも、坂東本とは異なる訓読が存することがうかがえる。こうした異同が諸本の如何なる箇所、どの程度現れているのかを分類に従って整理したものが以下の表三から表五である。

先ず、「提示説明の表現」について検討を加える。

表三 『教行信証』巻三各資料間における「者」字提示説明の表現に関する訓読の一覧

坂東本・真宗寺本・慶長本		用例 数
ズ	ハ	
ト	ハ	2
(割合)計		5

表三は、提示説明の表現において四資料間の訓読を異同のある例と、ない例、更に、付訓が充分でなく、訓読が異なっているかどうか判断出来ない例の三つに分けて示したものである。四資料の間で異同の存する可能性のあるものは、それぞれの訓読を上から年代順に掲げた。訓読の異同の生じ方が四資料で同じものはまとめてその用例数を右に示した。これによると、書写年代が降った資料である慶長本に、最も坂東本と異なる訓読が現れることが指摘出来る。表左の「坂東本との異同数」に認められる如く、書写年代が降るものに異同数が多い。具体的には、時代の降る資料に「者」字の不読例や、逆に「ハ」と訓んでいたものを「モノ」と訓む例等が見られる。この表に、書写年代が正確に特定できない西蓮寺本（後掲）などとの比較の結果を重ね合わせれば、「トイフハ」を付訓する例の増加などが見られ、異同の割合もさらに大きくなる。四資料に限った、提示説明の表現における訓読の異同の割合は一二・八％で、各表現中二番目に多い。

次に、「事物指示の表現」について一覧する。

表四 『教行信証』巻三各資料間における「者」字事物指示の表現に関する訓読の一覧

四資料共通の訓読		坂東本・真宗寺本・文明本・慶長本	
	(モノ)	数	用例
	(モノ) + 助詞・助動詞	18	
	モノ	1	
	モノ + 助詞	3	
	ヒト	5	
	ヒト + 助詞・助動詞	4	
		(78.3)	51 (割合)計

大部分の訓に見られない。そのことは、四資料で訓読の異なる例の割合が、三・一%と低いことからもうかがえる。少数ではあるが異同例を指摘すると、真宗寺本と文明本とは、坂東本で「ヒト」訓である箇所が「モノ」訓になっている例が見いだせる。

次に、「接続の表現」について一覧する。

中世における「教行信証」諸本間の訓読の異同

坂東本との異同数	四資料で異なる訓読		四資料で訓読が異なる可能性のある例										
	如炙頭燃者	大威徳者	代表的漢字列	重者	指者	徑造者	於説法者	无上常見者	何者	為不放逸者	於放逸者	修習涅槃道者	得聞是語者
	連体形く(モノ)	ヒト	坂東本	連体形+モノ	連体形(モノ)	連体形く(モノ)	ヒトニ	(モノ)ハ	ナニ(モノ)カ	(モノ)ト	(モノ)ハ	(モノ)ニ	(モノ)
1	連体形く(モノ)	(モノ)ハ	真宗寺本	連体形(モノ)	連体形(モノ)	連体形く(モノ)	ヒトニ	(モノ)ハ	ナニ(モノ)カ	(モノ)ト	(モノ)ハ	(モノ)ニ	(モノ)ハ
1	連体形く(モノ)	(モノ)ハ	文明本	連体形(モノ)	連体形+モノ	連体形く(モノ)	(ヒ)トニ	(モノ)ハ	ナニ(モノ)カ	(モノ)ト	(モノ)ハ	(モノ)ニ	(モノ)ハ
1	終止形く(モノ)	ヒト	慶長本	連体形+モノ	連体形(モノ)	連体形く(モノ)	ヒトニ	(モノ)ハ	ナニ(モノ)カ	(モノ)ト	(モノ)ハ	(モノ)ニ	(モノ)ハ
	1	1		1	1	2	1	1	1	1	1	1	1
	(3.1)2		(18.3)12										

表五 『教行信証』巻三各資料間における「者」字接続の表現に関する訓読の一覧

四資料で異なる訓読		四資料で異なる可能性のある例				四資料共通の訓読									
修念仏三昧者	願生安楽国者	不勉死者	言群賊惡獸詐親者即	若起善三業者	何者	代表的漢字列	願生无量寿国者	不断者	破壞衆生諸惡心者	代表的漢字列	坂東本	真宗寺本	文明本	慶長本	数用例
已然形くバ	已然形くバ	已然形くバ	無表記くバ	未然形くバ	ントナレバ	坂東本	已然形くバ	已然形くバ	無表記くバ	坂東本	已然形くバ	無表記くバ	未然形くバ	無表記くバ	1
連体形く(モ)ノハ	連体形く(モ)ノハ	ズくハ	未然形くバ	未然形くバ	ントナレバ	真宗寺本	無表記くバ	無表記くバ	未然形くバ	真宗寺本	無表記くバ	無表記くバ	未然形くバ	無表記くバ	1
連体形く(モ)ノハ	連体形く(モ)ノハ	ズくハ	無表記くバ	未然形くバ	ントナラバ	文明本	×	已然形くバ	未然形くバ	文明本	已然形くバ	無表記くバ	未然形くバ	無表記くバ	1
連体形くハ	已然形くバ	已然形くバ	未然形十バく[者]	未然形十バく[者]	ントナレバ	慶長本	已然形くバ	已然形くバ	無表記くバ	慶長本	已然形くバ	無表記くバ	無表記くバ	無表記くバ	1
						(7.6)3							(割合)計		
						(59.1)23							(割合)計		

坂東本・真宗寺本・文明本・慶長本

(シ)カルトナラバ

(シカ)レバ

ントナラバ

未然形くバ

未然形十バ

已然形くバ

坂東本との異同数		専念弥陀名者即	獲得金剛真心者	願生彼安樂淨土者	生彼国者即	若不生者
		已然形ハバ	已然形ハ	已然形ハ	已然形ハ	已然形ハ
		連体形ハ	連体形ハ	連体形ハ	連体形ハ	已然形ハ
		連体形(モノ)ハ	連体形ハ	連体形ハ	已然形ハ	ズハ
		已然形十バ「者」	無表記	無表記ハ	已然形ハ	ズハ
		1	1	1	1	1
		(33.3)13				

表五から、「者」字の接続の表現に関わる訓読は、その異同の用例数においては提示説明の表現ほどはないものの、異同している率は高いことがうかがえる。四資料で異なる訓読が三三・三%あり、他の表現における異なる訓読のある比率と比較しても、最も割合が大きい。異なる訓読法の中で注目されるのは、「者」字を不読とする例が慶長本に見られることである。

以上見てきたように、通時的に排列した四資料を比較すると、最も後に書写された慶長本に「者」字に関する訓読の異同が多く見られる。特に、提示説明の表現に用例が多い。しかし、各表現内での異同の比率からは、むしろ接続の表現において差が現れている。

次に、「者」字の訓読の異同が生じた原因を考察すると、一つには、書写された時代が降るに従い、訓読が受け伝えられにくいのではないかとということ、即ち、時代と共に変化することが考えられる。表記の面で返り点などにはその傾向が見られ、既にその点は明らかにされている。⁽¹¹⁾ もう一つの仮説としては、親鸞自身が推敲する過程で『教行信証』には幾つかの系統が生じていたことから、系統間で書写される訓読が異なっていたのではないかとすることがある。一見通時的に見える訓読の異なりが、実は系統間における訓読の異なりにすぎない場合である。しかし、今回の検討にお

いて、以下の理由により系統間で訓読が違ふことを反映している可能性は薄いと考える。

先の坂東本との比較において慶長本に最も多く訓読の異同を見出すことが出来た。その慶長本の系統には、他にも複数の写本が存する。特に、中山寺本は慶長本と同一の奥書を有しており、祖本を同じくする等、非常に近い関係の資料であることが指摘されている⁽¹²⁾。しかし、この二資料間における「者」字に関する訓読には異なりが見られる。

慶長本と中山寺本とを比較すると訓読に異同が見られる。以下に、異同の一部を示す。用例は上段が慶長本、下段が中山寺本の例である。

(慶長本・行巻)

不爾者我不作仏^セ (4オ1)

如^シ得^ル初果^カ者^ハ如^シ人^ノ得^ル須陀洹道^ヲ (8ウ5)

如^シ大海^ノ水^ノ余^ノ未^レ滅^者 (9オ4)

多^シ歡喜^ニ念^ス諸^ヲ仏^者 (10オ5)

三界^ニ第一^ニ無^ニ能^ク勝^{タル}者^ノ (10ウ1)

念^セ諸^ニ佛^ノ大法^ヲ者^ノ (10ウ2)

(中山寺本・行巻)

不爾者我不作仏^セ (4オ1)

如^シ得^ル初果^カ者^ハ如^シ人^ノ得^ル須陀洹道^ヲ (8ウ5)

如^シ大海^ノ水^ノ余^ノ未^レ滅^者 (9オ4)

多^シ歡喜^ニ念^ス諸^ヲ仏^者 (10オ5)

三界^ニ第一^ニ無^ニ能^ク勝^{タル}者^ノ (10ウ1)

念^セ諸^ニ佛^ノ大法^ヲ者^ノ (10ウ2)

念^ス希^有行^者 | (11オ2)

念^{スト}希^有行^者 | (11オ2)

若^無轉^輪王^相者^無如^是喜^上 | (12ウ1) 若^無轉^輪王^相者^無如^是喜^上 | (12ウ1)

今^説何^者 | (12ウ6)

今^ノ説^何者^者 | (12ウ6)

何^者如^華嚴^經云^二 | (24オ2)

何^者如^華嚴^經云^二 | (24オ2)

同^縁去^者早^相尋^二 | (37ウ6)

同^縁去^者早^相尋^二 | (37ウ6)

更^無過^者 | (55ウ2)

更^無過^者 | (55ウ2)

又、高田室町末期本と呼ばれる一本も高田慶長本と、同じ系統にあるとされる。⁽¹³⁾この高田室町末期本と、慶長本を比較しても、訓読の異同が見られる。異同の一部を以下に掲げる。

(慶長本・行巻)

無^過咎^者 | (7ウ5)

無^過咎^者 | (7ウ5)

如^大海^水余^未滅^者 | (9オ4)

如^大海^水余^未滅^者 | (9オ4)

無^能勝^者 | (10ウ1)

無^能勝^者 | (10ウ1)

念^希有^行者 | (11オ2)

念^希有^行者 | (11オ2)

中世における『教行信証』諸本間の訓読の異同

西蓮寺本に見られる訓読法は「者」字の提示説明の表現において「トイフハ」を頻用し、その点で坂東本と異なる。

又、室町時代写であるとされる寿福院本では、接続の表現において「ズンバ」^く「者」の用例や「トイフ」^く(モ)ノハ等の、坂東本には僅少な訓読法の例が多数見出せる。「ズンバ」^く「者」の用例は、「者」字の傍に語が付訓されず、接続助詞「バ」は直前に訓読される漢字に付訓されているものである。又、「トイフ」^く(モ)ノハとは、「者」字に「モノ」と直接に訓読している例である。

本節における検討をまとめると、「者」字に関する訓読は、提示説明の表現や接続の表現において異同が最も顕著に見られることがわかった。更に、これらの異同の要因については、慶長本や中山寺本などの比較の結果を見る限り、系統間の異同の反映ということ以外の要因が考えられる。又、慶長本が特異な訓読をした可能性もあったが、書写年代の明確でない他の資料において「者」字の訓読法の異同が見出され、慶長本以外にも異同の幅の大きな資料が存することを指摘した。しかし、これらの異同の要因が何であるかについて未だ充分な解答を持ち合わせていない⁽¹⁵⁾。

五、おわりに

以上、坂東本とその他の諸本との比較を通して「者」字に関する訓読に特に差が見られることを述べてきた。しかし、なぜ他の助字ではなく「者」字に異同が見られるのかについては現在、充分に考えをつくしてはいない。但、「教行信証」の助字の用例数について調査を行うと、「者」字の用例数が圧倒的に多い⁽¹⁶⁾。又、「教行信証」の写本には漢文を訓み下した延書本と呼ばれる資料群が存しており、今回の検討では現れなかったが、延書本の写本間で訓読を比較すると、「而」

字の訓み方に違いがあるという論も存する⁽¹⁷⁾。それらを考えると、今回の結果は、主として「者」字の用例数の多さに支えられて現れた事象であり、『教行信証』写本間の全文比較を行った場合や、『教行信証』以外の資料を対象とした場合、別の助字にも訓読法に変化が存している可能性は高いと考えられる。

最後に「者」字の如何なる用法において異同が多く存していたかについて付言すると、異同の用例数では、提示説明の表現に多く存し、表現内での異同の存する割合では、接続の表現に多く存していた。このように表現によつて異同の現れ方に偏りが見られることに何らかの問題が存するの否かについても今後の課題である。

中世における『教行信証』の伝授、書写のあり方については奥書や他の資料に記されたものがある⁽¹⁸⁾。しかし、訓読などの言語面に関するあり方にはあまり多く触れられていないのではないかと考える。今回の検討の結果、訓読は全く変化することなしに承け伝えられたものではなく、表記を中心として、助字や実字や読添語の訓読語等に改変された部分があったことがわかる。

注

- (1) 中田祝夫氏『改訂版 古點本の國語學的研究 總論篇』(勉誠社 昭和五十四年)、小林芳規氏『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓讀の國語史的研究』(東京大学出版会 昭和四十二年)、その他、石塚晴通氏『訓点語研究 今後の展望』(訓点語と訓点資料)九十三輯 平成六年)に中世以降の訓読語研究の問題点について言及がある。
- (2) 重見一行氏『教行信證の研究』(法藏館 昭和五十六年)の記述を参照した。
- (3) 瀧岡孝昭氏『西本願寺本「教行信證文類」成立考』(帯広大谷短期大学紀要 第三号 昭和四十年)参照。注3の論において、『教行信証』板東本は親鸞自筆の草稿本であり、親鸞が晩年まで加筆修正していたとされる。改稿のそれぞれの過程において幾つか書写されたものが存し、それらが複数の系統をなすことを指摘されている。
- (4) 差異について調査を行うため、試みに巻二のみに限定して行った。巻二は、丁数で計算すると『教行信証』全巻の約四分の

一に相当する。尚、「者」字の訓読の調査に関しては卷二と卷三を対象とした。『教行信証』坂東本の本文は『親鸞聖人真蹟集成』卷一・二（法藏館 昭和四十八年）による。用例を掲げる場合は、頁数と行数を示した。

(5) 『教行信証』諸本の比較には、重見一行氏寄贈の広島大学蔵紙焼き写真をも本文として用いた。

(6) 注2文献の巻末、写本目録参照。書誌的な事項についても同日録参照。

(7) 注3参照。

(8) 注2文献の目録並びに本文の記述を参照した。

(9) 注2文献、「第二章 坂東本の成立時期」「第三章 坂東本の改訂時期」等の内容を参考にした。

(10) 注1中田氏文献、小林氏文献に言及が存する。

(11) 小林芳規氏「返點の沿革」（訓点語と訓点資料）五十四輯 昭和四十九年。又、注2の文献の中にも記述がある。

(12) 注2文献、「第二章、第一節 正応四年出版に関する文献学的考証」を参考にした。

(13) 注12に同じ。尚、同論には、高田室町末期本は、本文の系統が、高田慶長本や中山寺本とは近い関係にはなく、六冊本系統の専修寺本の影響を被っていることが述べられている。従つて、厳密には同じ系統ではないと言えるが、奥書に同一のものを有し、形態が共通であることから比較の資料として示した。

(14) 注2文献、「第三章、第四節 西蓮寺

本に関する考察」等を参考にした。

(15) 訓読の違いの要因として、一 誤写に

よるもの、二 漢籍などの他分野の訓読法の影響、三 教義や解釈の差、四 個人的訓読の改変、等が考えられる。一の誤写の可能性については、自立語の訓読の違いなどを見ると、誤写であると想定出来るものもあるが、単純な誤写とは思

『教行信証』の卷二より卷五までの助字の働きを含む漢字数

真仏土卷	五卷	証卷	四卷	信卷	三卷	行卷	二卷
115	者	108	者	399	者	201	者
107	如	67	如	260	如	194	如
67	諸	63	也	239	之	121	諸
66	之	58	之	187	即	120	之
47	也	33	諸	179	也	105	也
39	即	32	即	125	已	76	即
25	於	27	而	119	諸	73	已
22	已	20	則	92	則	44	於
21	而	20	已	80	未	35	則
10	未	15	於	76	於	23	当
10	当	11	当	76	而	23	而
9	則	9	未	60	当	13	爾
5	乎	4	耳	23	爾	11	乎
4	爾	3	焉	12	耳	7	未
2	耳	3	爾	10	乎	7	將
2	焉	2	于	10	哉	7	耳
2	哉	1	將	8	矣	4	哉
1	將	1	矣	3	將	3	矣
0	與	1	乎	1	歟	2	焉
0	于	0	與	0	兮	1	于
0	矣	0	耶	0	焉	0	耶
0	耶	0	歟	0	于	0	歟
0	歟	0	兮	0	于	0	兮
0	兮	0	哉	0	與	0	與

われないものもある。四の個人的な訓読の改変については、慶長本以外にも「者」字の訓読の違いが存することから、現段階での見通しとしては個人的一回性のものではないと考える。むしろ二や三などの要因を背景とする史的变化ではないかと想像されるが、明らかにするには言葉の意味的な変化を視野に入れた広い調査が必要になると思われる。

(16) 前頁に『桂庵和尚家法倭点』中に助字として掲げられた漢字が『教行信証』に何例存するか一覽した。いずれの巻においても「者」字の用例数が最も多い。尚、用例中には助字の働きのでないものも含む。

(17) 注2文獻、「第五章、坂東本の成立過程(2)」(三七五頁)。

(18) 宮崎圓遵氏「真宗における聖経の伝授」(龍谷大学論集四百号四百一号 昭和四十八年)に、存覧の「一語期」(慶長元年(二十二歳)の記述に以下のものがあることを指摘されている。

「五月之比、大上(○覚如)御下向越前国、則奉扈從畢、廿余日御居住大町如道許、奉伝授教行証之間、依御与奪、予大略授之畢、」

(付記) 本稿は、平成十年度鎌倉時代語研究集会における口頭発表をもとにまとめたものである。席上、並びに、その後も多くの先生方から有益なご意見を賜った。ここに記して深謝申し上げる。また併せて、稿を成すに当たって終始御指導御意見を頂いた室山敏昭先生・松本光隆先生にお礼申し上げます。